

# 繰り返される人生

— 無限の愛の環 —

はじめにいくつかお断りをしたい。ここ数年、私は画像、音声、テキストを融合させながらフェミニズムおよび批評理論について論じることを試みてきた。こういった混メディア形式の講演を、私は一種の実験的な執筆ととらえている。それはすなわち、文字テキスト、音声、画像の重なりを作り出し、どれかひとつの層が他の例証となるのではなく、理論上、あるいは観念上これらが同時に語り、相互に補完しあうというものである。そもそも、「書く」という行為自体、あらゆる段階においてきわめて非直線的である。というのも、私はエッセイの別々の「トラック」（音声、画像、言葉）をほぼ共時的に行き来しながら書き、また書き進めるうちに「テキスト」のそれぞれの部分を整形していくからだ。そして、これらの各層も総体としてのテキストも修正され、改変されることを前提としている。今回

ウィッキー・キャラハン  
中井真木 訳

お話しするものも今まで幾度か異なる形で講演してきたものであり、私はこれらの講演を「草稿」として、われわれを取り囲むイメージや言説の変化に伴って書き換えることが可能であり、書き換えなければならないものとして見ている。これは現代アメリカの文化と、アメリカにおけるフェミニズムおよびセクシュアリティの変化し続けるあり方についての現在進行形のドキュメンタリーのようなものである。今回のプレゼンテーション自体が、映像資料も含め、意図的に最終完成版として仕上げられたものではない。それは私がここでやろうとしていることが、いま途上にあるものの跡を追うことであり、そしてそこではまさに途上にあることこそがおそらく最も重要な点であるからである。今回もまさにそれが具体的な形を残さないプレゼンテーションであるということによって、（あらゆる矛盾

を含みながら) いまたち起っている観念的葛藤をとらえることができれば幸いと思う。

内輪で行われた結婚式の後、チャールズ皇太子とカミラ・パーカー・ボウルズはカンタベリー大司教の主導による礼拝の一環として彼らの「多岐にわたる罪と不正」について公に告白し、大司教から結婚への祝福を受けた。この告白の文言は『英国国教会祈祷書 (Book of Common Prayer)』から引用され、おそらく彼らの結婚の条件の一つでもあったのだが、来るべき結婚の至福の始まりとしては、考えうる最もロマンティックでないものであった。奇妙なことに、このカップルの結婚したいという願いは国家的な危機を生じたが(彼は結婚するべきか否か、と尋ねる世論調査が延々と行われた)、それに引き換え、それ以前の不倫行為は英国国民にとってさほど物議をかもしものではなかったようであった。

アメリカ合衆国でも、二〇〇四年に結婚の公的履行に関する類似の危機が発生した。こちらの危機は、おそらく大統領選挙の年であったこともあって、非常に深刻なものとなり、ブッシュ大統領を含む多くの公人が、即座に国家的対応を取らなければ結婚の定義そのものが揺らぎかねないと発言する事態に至った。その保守派連合がいうところの脅威とは、増加しつつある同性婚の結婚式が、突如として全米各地で公的に認められるようになったことに由来していた。

本稿では、「結婚<sup>マリッジ</sup>」という語の用法について、結婚制度に関する近年の最も公的なデモンストレーションのいくつかを通して検討していきたい。これらのモデル(ここでモデルという語は、模型、理想、「キヤットウォーク」を歩くファッション・モデルなどさまざまな意味を含んでいる)は恋愛、結婚、そして離婚をめぐる現在の幅広い言説から取り上げたものであり、この作り出された危機をめぐる状況についていくらかの真実を伝えるものである。すなわち、我々が目撃しているのは「危機」というよりも、恋愛、セクシュアリティ、そして結婚の新しい定義、ポストフェミニズム時代、ポスト異性愛時代に生み出される新しい定義なのだ。なお、ポストフェミニズムというとき、私は米国および英国で現在流通している多様な言説を念頭におき、新たな急進的行動主義<sup>アクティビズム</sup>としてのそれと、より反動的、保守的な定義によるその双方を含んでいる。前者は過去のフェミニズムの理論および実践の中から生まれたものであり、前世代のフェミニストたちの業績の上に築かれ、これを継承する運動であるという意識から「第三次フェミニズム」と呼ばれている。一方後者は批評家クリス・ホルムランドがいうところの「チック(若い娘)・ポストフェミニズム」、つまり「フェミニズム以後の生活様式」という意味でのポストフェミニズムであり、より悪意をもった言い方をすれば、フェミニズムがあまりなく達成されたために、我々にははや獲得した選択肢を享受するのみであるような文化を指している<sup>2</sup>。

全世界に報道されたチャールズとカミラの懺悔を最初のがかりとして、まずこの結婚の「危機」を有名人の文化のなかに追つてみたい。知名度の高い公人は結婚の問題を検討するのに特によい対象であるが、それは決して彼らが実際に我々のモデルであるべきという意味ではなく、結婚が何を意味しうるか、何を意味するべきかという問題を広く議論するのによい場を提供するからである。また有名人は、訓練したにせよ、必要に迫られたにせよ、多くの場合職業的なパフォーマンスであり、このことが結婚の定義上、有用な技能を提供するのである。もつとはつきり言うならば、結婚の基盤は約束の公的履行<sup>パフォーマンス</sup>——貞潔の宣誓、指輪の交換、「はい、誓います」、そしてもちろん締めくくりの「花嫁にキスをどうぞ」——におかれているのである。だとするならば、我々が映画スターや政治家などの公人に対して、好感のもてる、納得できる形で、この儀式をよく、正しく、きちんと、完璧に執り行う<sup>演じる</sup>ことを求めるのも不思議ではない。我々は彼らがこれを正しく執り行うことを望み、それによって我々自身と同じこと(結婚、セクシユアリテイ、家族関係)を正しく行えるかもしれないという希望を持たせてほしいと思うのである。

この「危機」はさまざまな「完璧なカップル」の交際と破局のなかにも見出すことができるだろう。チャールズとダイアナももちろんそうだが、例えば我々はトム・クルーズとペネロペ・クルスの熱愛から破局までの恋愛の成り行きを目撃し、それに先

立つ完璧な夫婦とされたトム・クルーズとニコール・キッドマンの離婚(さらにはその後のクルーズとケイティ・ホームズの大々的に報道され、時にはシユールにすら見えたロマンズから、婚約、そして今では妊娠にいたる一連の騒動)を目撃した。おそらくさらにスキヤンダラスに扱われたのは、ジェニファー・ロペスとベン・アフレックとの大注目を集めたおっぴらな熱愛であった。このこれまた完璧とされた注目カップルは、米国では「ベニファー」と呼ばれていた(ベニファーとは、しばらくの間独立した人間として写真に撮られることが不可能なほどくつついていた二人の名前をくつつけたものであったが、当時は永遠に抱き合うかキスしあっているように見えたもの、そうとも限らなかつたようである)。一番最近では、メディアは必死になつて最も完璧であり最も美しく、そして最も人々に愛されていた、ブラッド・ピットとジェニファー・アニストンのカップルの破局(とそれぞれの新しい相手との交際)の詳細を報じている。

「危機」はライザ・ミネリとデイヴィッド・ゲスト<sup>\*</sup>の結婚式、別居、そして離婚訴訟にもみることができる。ここでも、結婚から別居までの出来事に公衆が接した期間(十六ヶ月)は「ベニファー」やクルーズとクルスの出来事とはほぼ同じくらいであった。しかしこれらの派手派手しい数々の失敗劇も、もう一つの有名人の恋愛に引き比べるとはるかに共感を得ている。それは、(今のところは破綻していない)女優兼テレビ司会者の

ロージー・オドネルとその長年のガールフレンドであるケリー・カーペンターの結婚である。この結婚式はアメリカ全土で結婚式を挙げている同性愛カップルとの明確な連帯のもとに行われ、それはあたかも我々に対して、結婚の約束、結婚、家族といった言葉の理解を押し広げるように求める、大掛かりな芝居かパフォーマンス作品を全国公演にかけたようなものであった。

恋愛と結婚の成就がハリウッド映画の主要な主題であることは何の不思議もないことであり、さらに近年では異性愛カップルの交際から別れまでの一連の物語とそれにもなう各儀式がアメリカのテレビ番組の一ジャンルを形成するに至っている。つまり、例えば『ザ・パチエラー』(独身者)、『ザ・パチエレット』(独身女)や『ジョー・ミリオネア』などのリアリティー「ゲーム」番組のことなのだが、この三つのテレビ番組では、一人の(経済的に、あるいは外見的に、あるいは両方の点で)非常に理想的な個人をめぐって、この人物を魅了し(少なくとも思想上は)結婚しようと試みる参加者たちを競わせ、最終的にその中の一人を理想的な人物の婚約者として「選ぶ」のである。これらの「リアリティー番組」に出演した「一般人」は、番組に出たことにより次々と有名人になった(例えば『ザ・パチエレット』からはトリスタ・レーンとライアン・サッターという夫婦が生まれ、今や米国では有名人となっている)。しかし、こういった「リアル」あるいは一般のカップルの関係も大変に移ろいやすいものになっている。トリスタとライアンは数年

たつてもまだ結婚しているが(これは有名人の世界では永遠に等しい)、番組上は「幸せな」有名人カップルを追ったMTVの「リアリティー」番組「ニューリーウエッズ 新婚アイドル——ニックとジェシカ」においては(このジェシカ・シンブソンとニック・ラシェイという二人が有名になったのが、番組で関係が放映されたことよっているのか、それともほかにも何か才能があるのかは、この番組以外にもわずかに音楽や映画でのキャリアがありはするものの、あまり定かではないのだが)、最近になってこの二人が仮面夫婦であったとして集中砲火を浴びる結果になっている。ニックとジェシカの「新婚の至福」の笑顔はカメラの前だけの演技、偽物だったというのである。

こういった有名人の恋愛儀式、おおっぴらなデートから婚約、結婚までを見ていくと、多くの場合、明らかに、時にはパロディではないかと思えるほど、王子と平民のおとぎ話のように語られていることに気づく。ダイアナ妃のチャールズ皇太子との結婚式については、最近公開された私的な音声テープにより、我々は今では、始めからカップルの形成などまったくなかったことを、この結婚が問題を抱えており、不完全なロマンスであったことは最初から関係者全員にとって明らかであったことを知っている。もちろん、これが王族の愛のない結婚の最初の例だなどという気も、恋愛、幸せ、結婚の幸福(王族の結婚とは個人だけでなく国家の再生産である以上、個人的な幸福と国

家的な幸福双方を意味するが」といった公的なショーじみた光景の裏に別の私的な現実が隠されていなかった結婚の最初の例であつたという気もない。ある結婚式が偽物であつたか、真実であつたかといったことを問題にしたいのではない。そもそも結婚式とは「事実として真か偽かを問うものではなく」、<sup>3</sup>「遂行的な（発言によって行為が遂行される）行事であり、のみならず、発言することこそが儀式の次第であるという点においてまさに遂行的行為の典型であるのだから。あるいは、遂行的行事として行われたか否かを問題にしたいのでもない。そうではなく、その式が適切であつたのか、オースティンがいうところの用語の「不適切表現 infelicity」、「誤用 misapplication」にあるのかどうか（例えば、すでに結婚していたり、儀式を遂行している人が資格外であつたりすれば誤用となる）ということ<sup>4</sup>を問いたいのである。

誤用の問題に入る前に、近年の有名人の結婚式が、公共性、舞台設定、あるいは単に費用の面で、非常に王族の結婚式に似通つてきていることについて注目したい。結婚式を取り囲む消費者向けの演出装置は驚くほど類似している。城か都会の要塞としてのホテル（マドソンとガイ・リッチー、ポール・マッカートニーとヘザー・ミルズは城、マイケル・ダグラスとキャサリン・ゼタ・ジョーンズ、ミネリとゲストは高級ホテル）に場をおき、過剰な装飾を施し（上記の式で花にかけられた法外な費用

についてはマスコミで報道された）、キスをし（私的に、公的に、あるいはマッカートニーのように売るために）、そして指輪を交換する。以上の要素はあまりに様式化されているために、『ザ・パチエロレット』の第一シーンが米国で終了したときには、そのほとんどが取り入れられた。トリスタは物語と<sup>5</sup>舞台設定（映画用語で言うところのミザンセン）をきちんと心得、場面とそれにふさわしい感情をすばらしく演じたのであつた。

それだけではない。この物語は我々にとつてとても強力であるがために、誤用がいろいろとあつたとしても、我々は破局、ロマンティックではない告白や不自然な「はい、誓います」までも物語中のあるべき位置におこうとする。チャールズとカミラの結婚式の実況放送において、米国ケーブルテレビ局WEの解説者がこの行事をなんとかして恋愛物語にはめ込もうと努力しているのを見るのはさすがに驚きであつた。「三十年間の情事を経て、ついに末永く幸せ（おとぎ話の締めくくりの言葉）になる機会が彼らに訪れたのです。」あたかも彼らが戦争や貧困などの悲惨な出来事によつて引き裂かれていたかのような物言いであつた。ここでは彼ら真の恋人たちが引き裂かれていた（とはいつてももちろん十分には引き裂かれていなかったのだ）が不幸の詳細は語られなかったのだが、本当のところはそれはほかの人たちと婚姻関係にあつたというものであつた。

先に、結婚式が遂行的な行事であることを指摘した。この概念にはもちろん、パフォーマンス(公的な儀礼、あるいはショーとしてのそれ)の要素も含まれてはいるが、私がここで遂行的という際には、非常にはっきりと限定的な意味で用いており、単に楽しむものとしてのそれではなく、法的な行為までも含んだものを指している。「誓います」「約束します」「(洗礼により)名付けます」など)遂行的行為とは、文化の根幹の文脈に行為の意味を関連付ける方法を確立するのに不可欠であり、(法的な拘束力を持つ発言、結婚、命名など)もつと重大な行為なのである。遂行的行為は、なにか本質的な真実を指し示すように機能するのではなく、解釈を指し示すように機能する。解釈とはすなわち、時とともに再話され、再筆されることで意味と力を与えられることであり、こういった繰り返し/再演こそが、逆説的に意味を強化するのである。こういった遂行的行為こそが、繰り返しによって「当然」とか「真の」といった言葉を獲得していくような文化的/言語的慣習なのである。同時に、遂行的行為の非本質的性質や、機能するための再話の必要性が、当然性と同じくらいはつきりとした不確定性を遂行的行為に与えている。つまり、ある特定の言葉を生み出し、これを定義し、そしてこれを自然化することは、常に意味の揺らぎや反発力を同時に引き起こす。というのも、再話される内容はほとんど常に「同一」であることがなく、相当量の変形を含むからだ。

流動性はあらゆる遂行的行為の主要な、しかし一般的には認識されていない性質であり、それがゆえに、どんな形にせよ安定や明確性、あるいは意味の一貫性が求められた場合には(今回の事例に当てはめるならば、異性愛、家父長制といった特定の観念的ヘゲモニーを保つために、異性愛結婚の安定や広く共有されるべき結婚の意義の安定が求められた場合には)、用語の誤用をしないことがきわめて重要である。遂行的行為が誤用された場合、行為は真でないとか偽であるということではなく、無効になってしまう。先に述べたような正しい文脈に加えて、J・L・オースティンが指摘しているように、我々はその行為にふさわしい思考や感情を持たなければならぬ。これは難しいことであり、なぜなら「観衆」は(そして演者たち自身も!)思考や感情を読まなければならないからである。このことが呼び覚ますのはもちろん、チャールズ皇太子がダイアナとの婚約を発表した際の(婚約者と並んで座りながらの)発言である。恋をしているかと聞かれて彼は次のように答えたのだ。「もちろん……何を恋というにせよね……」<sup>7</sup>

この発言(そしてその後引き起こされた皇太子の不道徳行為)は、今回の潜在的な「不適切な表現」への懸念の中で広く言及されている。チャールズのカミラとの再婚においては、誤用の問題について、それをにおわせることにすら深刻な懸念があった。今回はチャールズは「約束します」とか「あらゆる他者と交わらず」とか「誓います」と言うときに、本当にそのつ

もりで言っているのだろうか。カミラもそのつもりで言っているのだろうか。もし今回もチャールズが本当にはそのつもりでなければ、間違いなく今度こそ、イギリスの王制そのものが揺らぎ、ナショナル・アイデンティティや国家制度に関するあらゆる議論が噴出することになるだろう。だからこそ、チャールズとカミラは彼らの過去の罪を告白し、「神の助けにより、できる限り誠実であり続けるよう努力します」という留保発言までしたのであった。ロマンティックではないし、取り立てて納得できるものでもないが、不可欠な発言であった。

このような曖昧性を通して、近年のいくつもの有名人の結婚式の後に起こったヒステリー現象の内容について考えることができるだろう。例えば、マイケル・ジャクソンとリサ・マリー・プレスリーのそれやライザ・ミネリとデイヴィッド・ゲストのそれである。米国では、誰の目にも明らかに、世間の人々が長いこと過剰なほどこれらのカップルを冗談や世間話のネタにしていた。本当に性的に夫婦になる／なれるのだろうか？ セックスをしているのだろうか？ 子供はできるのだろうか？……非常に興味深いことに、どちらの事例でも、養子縁組を望む彼らの希望、特に異なる人種の養子を迎えようとしていることへ多くの注目が集まった。そのことにより、結婚関係の潜在的な「差異」は、彼らの将来の子供たちの人種の差異という目に見える標識に置き換えられる。子供の問題は、たとえ養子であっても、夫婦の「差異」に対する論評をかわず護符のように機能

する。人種差別から解放された家族は、あらゆる障害を乗り越える一種の超越的愛を強調するものとして注目され、彼らの口マンスは、異性愛の規範的語りの縛りのなかで再話されていく（そしてこの意味では、王子が平民と結婚し、階級差を乗り越える超越的愛のおとぎ話を継承している）。

人種やエスニシティを前面に持ち出すのは、これらのカップル現象に繰り返される特質である（例えばジャクソンとプレスリーの結婚、アフレックとロベスの恋愛、ゲストとミネリの予定された養子縁組）。ここには超越的愛という考え方と同時に、差異への意識も見てとることができる。ゲストは結婚式で彼とライザは四人の養子を迎えようと計画していると発表した。

「あらゆる人種から、黒人の子供、白人の子供、そういうことはまったく関係なくです……ライザは世界で一番の母親になります。彼女は今まで会った誰よりも広い心を持つてるんです。」。類似の言説がテレビ番組『ブライム・タイム・ライヴ』のジャクソンとプレスリーへのインタビュでも見られた。養子を迎える予定であるという噂について聞かれると、ジャクソンは次のように答えたのだ。「もちろん子供を迎えたいですね。ずっとやりたかったことのように思います。だけど、あらゆる人種の子供でないとね。アラブ人の子、ユダヤ人の子、黒人の子、あらゆる人種です。」インタビュアーにけしかけられると、マイケルはリサ・マリーの前夫との間の子供も養子に迎えたいと言いつつ、これはどうやらリサ・マリーを困惑させたよ

うで、彼女はすぐに「彼らには実の父親がいますから……」と述べたのだ<sup>9</sup>。

デイヴィッド・ゲストとライザ・ミネリの結婚と破局の場合、我々は最もあさましく、信じがたい光景をいくつか目撃することになった。初めには結婚式での悪名高いキスがあり、それからタブロイド紙をにぎわしたライザが酒を飲んで暴れたとされる事件や、デイヴィッドの暴力、そして名目上は苦痛緩和といつて行われたデイヴィッドのボトックス治療（皺除去の美容整形に使われる）が伝えられた<sup>10</sup>。ライザの話はおそらく、有名人のロマンスの中でも特に人をひきつけるものの一つであろう。それは主に、完全に同じパフォーマンスを繰り返しているからである——彼女自身の四回の結婚と最低でも二回のリハビリを通してだけでなく、彼女の母親（ジュデイ・ガーランド）の人生を繰り返しているという点においてもである（もちろん、我々はみなある意味では母親の人生を繰り返すのだが）。さらに重要なことは、この母子の人生はそれ自身が強烈なパフォーマンスであるということである。事実、彼らは主演映画のなかで描写され、主題化されている（たとえば、『スタア誕生』でジュデイ・ガーランドは「ボーン・イン・ア・トランク」〔旅行鞆の中で生まれて〕を歌い、ライザ・ミネリは「ニューヨーク、ニューヨーク」の中であまりにプレヒト的なナンバー「ハッピー・エンディングス」を歌った）。このような映画の中では、我々が見ているのは全人生を舞台上で過ごしたベテラン俳優た

ちなのだとスターたちが自ら教えてくれる。「ボーン・イン・ア・トランク」の中で、幼少から壮年まで描かれているのは、エスター・プロジェクトではなくジュデイ・ガーランドの人生であり、ライザの場合も、フランシス・エヴァンズのだけでなく、ライザ・ミネリの父親兼プロデューサー兼夫との家族的恋愛なのである。

ライザ・ミネリを見ると、世代を超え、時間に打ち勝って無限に循環する環を見ているような気にさせられる。それと同時に、これがおそらく一番重要な点であるが、通常の遂行的行為の機能のように繰り返しが（例え差異があつたとしても）ある特定の定義を自然化しコード化するのではなく、ガーランドとミネリの場合は逆に、繰り返されるたびにそれがこれ以上ないほど不安定なものに思われるのである。ジュデイとライザはともに非常に際立った人物であり、我々は彼らがどこにいうとその声や存在に気づかずにはいられない。しかし、なぜか我々はいったいこの二人の女性が誰なのか、一切手がかりがないように感じるのだ。彼らはそのうわべばかりが目につき、奇妙さと病気の症状の塊のように思われる（ダイヤーがガーランドについて指摘するように、彼女は「神経症」で有名である<sup>11</sup>）が、しかしこういった「ディテール」にも拘わらず、そこにはいかなる性格の深みも見出すことができない。彼らが深みのない人間であるというのではなく、彼らがどんなに頻繁にインタビューされても、我々はこの人物たちの思考や信念に触れるこ



とがほぼまったくできないのである。

ここで注目すべきなのは、『ニューヨーク、ニューヨーク』の「ハッピー・エンディングス」の中で、ライザは彼女を見出したプロデューサー（平民を見出す王子）と結婚し、彼は彼女に指輪を与えるが、彼女の仕事を引き離すということである（ただしこれも最後には再循環するだけで、映画の劇中劇が白昼夢として機能しており、歌が終わると同時に夢見る劇場案内人はプロデューサーにぶつかると）。この物語の流れはゲストとミネリの恋愛まで読み進めていくと、奇妙なじみのあるものとなる。ゲストはミネリのイメージを個人としてもプロ歌手としても再生し、カムバック・ツアーを企画して彼女のキャリアを復活させたとされているからだ。しかし、これを読み戻すことも可能だ。というのも、この役回りはジュディ・ガーランドの三番目の夫であるシド・ルフトが彼女が仕事で悩んでいた時期に演じたものでもあるからである。ルフトは一九五四年のガーランドの復帰作『スタア誕生』を企画したプロデューサー兼夫であった。ライザ・ミネリの『ニューヨーク、ニューヨーク』内の「ハッピー・エンディングス」の場面は、『スタア誕生』でのジュディ・ガーランド、すなわちヴィッキー・レスターの感動的なオスカー受賞スピーチの場面と引き比べて見たときには、特に異化的な効果を生む。その震えながらも堂々とした「私がミセス・ノーマン・メーンです」という宣言は、奇妙にひっくり返され、娘であるライザが、仕事のないよれよれのスターとし

てのノーマン、ふさわしくもないのにジュディの役を演じる羽目になってしまった場違いな役者として現れてしまうのだ。突然、「私がミスター・ライザ・ミネリです」と叫ぶデイヴィッド・ゲストの声が聞こえるような気がしてしまう。これは実は反転の反転である。ガーランドの『スタア誕生』はそれ自体伝統的側面があり、実際は「よれよれの」スターガーランドがノーマンに投影されていたのであり、そしてこの作品で復活したのは彼女自身だったからだ<sup>12</sup>。

私が主張したいのは、こういった繰り返し返しの強い力によって、ライザとデイヴィッドに関する「疑問」（彼はゲイなのか？ 彼らはセックスをするのか？）が、非常に極端な形（本当に知りたいわけ？ それの問題なの？）で常に答えられるということである。確かに、彼らの破局の後、ポディーガードが彼らはアパート中のあらゆる場所でもセックスをしていたと証言したという話だし、彼らに性的交渉があったこと、少なくとも性的交渉の痕跡——セックスをしようと服を脱いだときに撒き散らされた下着——があったことは否定しがたい。あるいは

次のミネリの言葉を見てみよう——破局直後になされた否定発言であり、非凡な才能の表出である。「別居中の夫デイヴィッド・ゲストがゲイかどうか聞かれると、（「ライザは」）知らないと言った——だって一度も彼と寝たことはないから、と。」<sup>13</sup>

デイヴィッドとライザの結婚式は、我々の目にはあまりに遂行的／芝居的であったため、この行為／芝居が異性愛の本質

的意義を確認したものであると我々が誤って理解する可能性は如何にしてもなかった——そうであってほしいという要求は執拗だった。結婚式の招待客や関係者のインタビュアーやビデオレターを見れば、非常にはつきりとこれが芝居であつたことへの言及をみてとることができる。ジル・セントジョンは「楽屋がある結婚式なんて初めて見たよ」といい、デザイナーのボブ・マッキーは飛び交う業界用語について語つた。「教会全体をまるで舞台みたいに話してたよ……『舞台裏』とか、『キューを送つてね!』とかさ。全部がショーだったよ。」<sup>14</sup> また別の招待客は関係者全員の仮面のような顔を指して「千人のフェイスマスクの夜」と言つた。<sup>15</sup>

セックス(彼らはしてるの?)と子供(何人?どんな色の?)の問題に氣をとられてしまつたが、制度としての異性愛に与えられた動揺は、デイヴィッドとライザの性生活から来るのではなく、我々が結婚が遂行的であるということを超えず、繰り返し／循環的に認識していることからくる。ライザとデイヴィッドやチャールズとダイアナのようなこの問題の誤用が指し示すことは——それはカッパルが実際に何をするかということではなく、彼らがしているかもしれないこと、しているはずのこと、そして我々が知ることに對する大衆全体を支配している強迫観念(『ピープル』誌や『アス』誌を適当に取り上げて表紙を見ればわかるように、我々は明らかにこれらのカッパルに執着している)によつて指し示されるのだが——セクシュアリティとは

指輪や城やキスがそうであると指し示すほどには固定してないということなのだ。ライザが新婚の至福の中、デイヴィッドは「男性に抱いた理想すべてを兼ね備えた人」<sup>16</sup>と述べた時、私は、そうなのよね、私もよ、と思つた。本当のところ、彼らが別れたときは結構悲しかった。確かにゲストはキスされる相手としてはものすごく恐ろしいが、それでもこれほどまでも遂行性を前面に押し出した結婚には微笑ましく、とても感じが良いものがあり、つまりこういういつた結婚は、結婚が「本質として」どうあるべきかという固定概念(そしてそれは幻想であり、現在の真の危機なのだが)を捨てることを求めてくるからなのだ。

さて別の事例に移ろう。ペン・アフレックとジェニファー・ロペスの恋愛だが、ダイアナ妃の場合には誤用を解き明かすのに何年もかかったが(我々が誤用の及んだ深さを本當に知つたのは例のテープによつてだった)、ベニファアの物語では、デイヴィッドとライザと同じくらいのものすごい速度で熱愛から破局まで至つたのだつた。それだけでなく、この二つの恋愛の重なり、また特にベニファアの事例においては結婚の段階／舞台へ入ること、自体に失敗したことが、この事例を異性愛と結婚のあり方の考察のとりわけ重要な手がかりにするように思われる。アフレックとロペスの場合もすべての要素は出揃つていた——指輪(ハリー・ウィンストンのピンクダイヤモンド)にヴェ

ラ・ワンのドレス（ところでこのドレスについては、ジェニファー・ロペスが彼女の結婚式は絶大な広告効果があるからとデザイナーを説得し、一万五千から二万ドルはするドレスを無償で入手することに成功したのだ）<sup>17</sup>。そして赤じゅうたんの上的お決まりのキスがあり、ペンはいつもよそを見ているようなので、奇妙なことに、公衆の面前でのアフレックのキスはどこことなくデイヴィッド・ゲストのよりも気持ち悪い感じがした……もう一つの至る所で見られた場面は、ペンの手がきちんとした身なりのロペスのどちらかといえはどっしりした腰に回されている写真イメージであった。『デイトラインNBC』（ダイアナ妃の音声テープや、ミネリとの離婚後のデイヴィッド・ゲストのインタビューも放送した番組）でのインタビューで、ロペスとアフレックは予定されていた結婚式、子供、そして女優兼歌手の台所での腕前について語っていた。ペンの「食器洗い」の下手さ、どうやって子供を育てようと思っているかとか、アフレックの野球熱についてこまごまと詳しく語られた——家庭的な平々凡々とした雑事についてのきわめて普通にあるような話を視聴者は次々と聞かされ、彼らは「我々とまったく同じ」で、だから「恋愛・結婚のよきモデル」であることを証明する役割を与えられたのだ。

もちろんこういった言葉はロペスのスターとしての人物像の鍵であり、我々は絶えず、彼女が近所にいる女の子のようであるとか、素朴な人であるとか聞かされている（実際は彼女は

ショービジネス界随一の豪華で維持費の高い外見を誇っているのだが——VH1「音楽専用の米国ケーブルテレビ局」で彼女の外見がどれくらい高価か、すなわち美顔、ネイル、ダイエツト、服もろもろの費用がどれくらい高価かについての特集があったくらいである）。この「労働者階級」の「普通さ」がロペスの人物像の鍵であることこそ、『メイド・イン・マンハッタン』や『モンスタースター・イン・ロウ』が利用している点の一つなのである（すなわち、物語を多少なりともありえそうなものにさせているのである）。『メイド・イン・マンハッタン』では、ジェニファー・ロペスは驚くほど美しいホテルのメイドを演じた——彼女の大衆的な誠実さと良識によってハンサムな億万長者を手に入れるのである（もちろん、彼の注意を引くためにはメイドの衣装を脱ぎ捨て、ホテルの客の一人から服を借りなければならぬのである）。

アフレックの「普通の人」らしさは、野球チーム、ボストン・レッドソックスへのよく知られた、長く報われないファン愛によって形成されており、これこそがスター性に不可欠な「普通さ」を彼に付与している（なぜなら普通さがスターに幾分か個性を与え、同時にそのおかげで我々は彼らの豪勢で過剰に公表されている生活を完全には嫌悪しなくなるからだ）。『デイトライン』のインタビューは米国メディアの集中攻撃のごく一部に過ぎない。カップルはメディアの注目に不満を述べていたが、同時に、明白にこれを利用して利用していた。アフ

レックとロベスは、一時は米国の本場にあらゆる場所で見ることができたのだが、結局ベニファアの結婚式、そして恋愛そのものが取りやめになってしまった（この展開はそれぞれに報道が彼らを追い回したせいだとされた）。

破局直後には、すでにロベスは昔の恋人と子供をもうける予定にあると伝えられた（そして実際すぐにこの歌手、マーク・アンソニーと結婚した）し、ベン・アフレックは新作映画『世界で一番パパが好き』のプロモーションに監督ケヴィン・スミスとともに励み、自身のルーツに戻ろうとしている（『世界で一番パパが好き』は彼が近年出演していたハリウッドの超大作やロベスとの恋愛とは異なる、まじめで小規模な映画である）。

映画のプロモーション・ツアーの一環として行われたインタビューで、アフレックは彼の役どころを謙遜し、映画の本当のスターは彼でも監督ケヴィン・スミスでもリヴ・タイラーでもなく、映画の中でベンに自身を取り戻させる彼の娘役を演じた若い女優だと述べた。インタビュアーでは、アフレックの女遊びは無視され、母親といるところとか賭博台に座っているとこの写真が撮られている——彼が博打好きなのはいまや彼の大衆性を維持するのに有用な要素である、それというのも、飲酒や女性関係では問題を起こしては報道されて、もはやキャリアを傷つけるようになっていくからなのだが——つまり言葉を変えるならば、果たして彼は人物像に何らかの「きわどさ」を与えずに男性スターとしての地位を維持できるのだろうかということ

なのだが。

しかし、ベニファアの恋愛の崩壊から燃え尽きるまでのめまいのするようなスピードも、もう一組のスターカップルの破局には負けるほどである。それはトム・クルーズとペネロペ・クルーズである。タブロイド紙の紙面はまさしくクルーズとクルーズの話で埋め尽くされていた。ヴァレンタインデーのロマンティックな休暇とか、「デート」にクルーズがペネロペにモロッコ旅行をプレゼントしたといったものであったが、同じ年のアカデミー賞の時期（三月）には、トム・クルーズは授賞式に一人で出席したことがはつきりし、直後には破局が公表されたのであった<sup>18</sup>。アフレックとクルーズのどちらの場合も、彼らの恋愛への注目がこれほどにも高まるのは、おそらく彼らそれぞれに付きまとう、彼らがゲイであるというゴシップと無関係ではないであろう。アフレックが映画で演じる役は、しばしば「混合ロマンズ」という「サブジャンル」に入れることができるように思う——つまり、有名な二作品（『チェイシングエイミー』とアフレックがジェニファー・ロベスと共演し、悪評高かった『ジューリ』<sup>19</sup>）での彼の役どころはレズビアンと恋愛関係になるというものなのだ。またもちろん、目下話題のトム・クルーズとケイティ・ホームズの恋愛は、このスターのセクシユアリティについて更なる関心を呼んでいる。スキヤンダルを呼んだオブラ・ウインフリーの番組でのインタビュアーでは、クルーズはホームズへの愛を雄弁に、一部では気違いじみていたという

人もいたほど激しく語り、とある有名な朝の番組で葉について自説を垂れはじめた事件とあわせて、この俳優の奇行リストをマイケル・ジャクソンの領域にまで近づけてしまった。

もつとも最近注目された破局は、やや別の性質であるが、同様に結婚の概念を揺るがすものだ。というのは、それは「まさにパーフェクト・カップル the perfect couple」とされたジェニファー・アニストンとブラッド・ピットの誤用だからである。恋愛の進展の早さという点ではクルーズとクルスやベニファアの事例ほどではなかったが、しかしおしどり夫婦の電撃的別居と離婚という派手な話題性には事欠かなかった。おそらく、この破局の最も興味深い点は、別れた夫婦を取り巻いた挫折と破局否定の言説であろう。挫折発言は主にジェニファーやその女友達のものとしてタブロイド紙の記事に取り上げられた。失意のジェン、とか、彼女は関係を修復しようとしている（ブラッドのアンジェリーナ（・ジョリー）との浮気は本当か？）とか、空港でもブラッドとの夕食でも涙を拭いていた、とか、「ジェンは愛する人をまだ信じることができるのだろうか？」<sup>20</sup>とか。そしてメディアにはこの二人のスターのよりを戻させようとする執拗な動きがある。二人はまだ親密だとか、ブラッドは授賞式でジェンがアンジェリーナに会わないように気を使っているとか——離婚届が正式に提出された直後には、ブラッドとジェンがまたデートをしているという大見出しが躍り、今ではタブロイド紙が彼らはかつてないほど親密だと大騒ぎをしている——

——実際のところは、その直後にブラッドとアンジェリーナが赤ん坊を養子に迎えようとしている（なんと外国からの養子）というスクープが飛び込んできたのだが。映画評論家パトリシア・メレンキャンブが言うように「結婚は九〇年代の流行ファッションだった」<sup>21</sup>のならば、そして本稿の冒頭で見たような大規模な結婚式がその流行の最後の名残であるならば、離婚や大々的な破局騒動こそは新千年紀の流行ファッションなのである。

ダイアナ妃のテープ騒動はこの方向性を指し示している。もちろん、皇太子の浮気を我々が知らなかったわけではないが、結婚式の誓いも結婚の約束も（決意も、感動も、感情も）明白に始めから誤用であったことが問題なのである。一連のテープを聞いて我々は、ダイアナがチャールズのカミラへの想いを非常によく知りながらも、祭壇へ向かって歩きながら彼が誠実な夫になることを願っていたことを知った。当時のダイアナにとっては当然ながら結婚式が悲劇の瞬間であったが、今になってこのことを知った我々も類似の喪失感と悲しみを経験したのである。おとぎ話を信じたことになっている人々に対しては、彼女の声を録音したこの証拠がおとぎ話を完全に打ち碎き、もはやおとぎ話として維持することが叶わなくなってしまった。結婚式の行事そのものよりも、彼女の声を通してあの行事を我々が再読することがすべてを動揺させ、我々に対して誤用を前景化するのである（そしてだからこそ最近行われたチャール

ズとカミラのロイヤルウエディングがこんなにも奇妙に見えるのだ)。

最初に取り上げたジレンマに戻ろう。果たして、今現在結婚に危機が訪れているのだろうか。ブッシュ大統領や米国の保守層が主張するように同性婚が異性愛の崩壊をもたらしているのだろうか。ロージー・オドネルが市庁舎でガールフレンドと結婚の誓いを交わしたことを公表し、そこらじゅうのタブロイド紙の見出しを「Mr. & Mrs. ロージー・オドネル」と賑わしたことが「問題」なのだろうか。オドネルの事例で大変興味深いことは、彼女たちや他の同性婚への保守層の政治的反応や、辛辣な「ロージー夫妻」というコメントを脇におけば、大半のメディアの反応は(やじ馬根性丸出しであるにしても)ロージー・オドネルに対して非常に好意的であるということである。彼女がパートナーや子供のことをどれほど心から想っているかということが多く語られている(子供の問題は明らかにセクシユアリティの問題に打ち勝ち、タブロイド紙に対して結婚を公認させた)。よって、ロージーと彼女の「女友達」が提供するのほもつぱら結婚の評判を上げるもので——それは絶望的に必要とされているもので、そのことはここまであげてきた他例(破局のそれだけでなく、成功<sup>サクセス</sup>と行き過ぎ<sup>エクセセス</sup>を示す象徴的な印(例えばブラッドとジェンの完璧な千三百万ドルの家)に衆目が集められた「よい」恋愛と結婚も含めて)を見れば明らかであるが——

ロージーの話題はほとんど常にカップルの責任や家族についてのなのである。

ハッピーエンドは存在するのだろうか。脅威が迫っているのは結婚に対してではなく、異性愛と結婚に関する特定のパラダイムの維持可能性に対してである。チャールズとダイアナに具現化されたおとぎ話的なロマンスとしての結婚は、もうすでに崩壊したのかもしれないが、私はもう少し別なものに目を向けている。私が見るのは「ポスト異性愛」時代に入ったのかもしれないというのは、異性愛が本質を一切伴わない遂行的行為であるという概念(これは重要な点であるが、この用語を通して私が見たいのは、唯一の概念ではない)を超えて議論しようとしているのである。私が主張したいのは、今日検討してきた事例は、恋愛・結婚の遂行<sup>パフォーマンス</sup>／演技のあまりに過激な前景化を示し、その繰り返しがあまりにも速く、あまりにもおっぴらに行われるがために、今や我々自身がすべて了解済みのパフォーマンス参加者となり、二項対立の概念としての異性愛と同性愛の区分をほとんど維持不可能にしているということなのだ。別の言い方をすれば、異性愛者もゲイもレズビアンもみな同時にこれらのカップルを「キャンパブな」読み方を通して——つまり純然たる芝居かパフォーマンスとして——見ようとしているのかもしれないということである。ここで重要なことは、私は決してあらゆるセクシユアリティが故意に、意識的に、自発的に遂行<sup>パフォーマンス</sup>され／演じられることができるのか、衣服や髪の色のように

に簡単に性的アイデンティティを取り替えることができるというわけではない。実のところ、こういった考え方はJ・オースティンやジュディス・バトララーの著作に見られる遂行的行為の作用に対する典型的な誤読であり、私が主張したいこととまったく異なるのである。また私は、テレザ・デ・ラウレティスなどが「セクシユアル・(イン)ディフェレンス〔性的差異／無関心〕」への動きであると名づけ批評したもの——ポスト構造主義者およびフェミニスト(主に異性愛主義フェミニスト)の唱える、我々がユートピア的な性的不確定性の時代に入り、生物的／文化的性的役割は(ジュディス・バトララーの著作の誤読のように)思うがままに身に着けたり脱ぎ捨てたりできる時代になったという理論から導かれる一つの考え方——を主張したいのではない<sup>22</sup>。こういった制限のない観客の媒介とか解釈の無限性という幻想は現在我々のディシプリンを席卷しているが、そこには異性愛主義に対してナイーヴかつ実を伴わない政治的関与をしてしまう危険性が潜んでいるし、これらはさまざまな意味においてポストフェミニズム的「選択可能性」イデオロギーの亜種に過ぎない。こういった幻想は現実の強力な社会的、心理的な性的構造の成り立ちを無視し、それだけでなく同時に、多様性と称する特異な一様性を通して我々を異性愛パラダイムの「規範」に押し戻し、レズビアンを要求を消し去ってしまう。

これは決して私が「ポスト異性愛」という用語で述べたいこ

とではない。そうではなく、私が言いたいのは、本稿で問題としてきたような数々のパフォーマンスによってこれらの用語が「自然化する」力が奪われてしまったということである。もちろん、パフォーマンス自体はしばしば自然化の過程に関与しこれを強化しようとする。しかし現在進行している失敗や、失敗のおこる速さ、そしてこれらさまざまな恋愛「パフォーマンス」への大衆の詮索や憶測が、すべてこの力の枯渇に向かって作用するのである。私の考えではこの現象は、これらカップルの行動に反応して人々が起こすヒステリーの中に見ることができ。トム・クルーズとケイティ・ホームズの最新ゴシップにもう一度目を向けたとき、私が興味深いと感じるのは(クルーズの行き過ぎだけでなく)世論の行き過ぎた反応なのである。さまざまな記事やウェブサイトで気付くのは、それとなく、或いはかなりあからさまにクルーズに向けられる同性愛嫌悪的な攻撃であり、これらは主に彼が「カミングアウト」すること(そして我々がみなこのことを知ること)を要求することで、使い古された(異性愛対同性愛の)二項対立的パラダイムを強化し、過去の遺物であるカテゴリーを強化しようとしている<sup>23</sup>。その一方で、オブラ・ウインフリーのクルーズとの奇怪な対談の間中、熱狂的な彼のファンが黄色い歓声を上げ続けていたことも事実だ。ここで重要なことは、観衆からのこの賞賛や、まあ言ってしまうは狂乱が、国中が見世物として彼のロマンスを(見ながら)笑っている時に同時に起こっていることである(そ

してこれは他のロマンスでも同じことで、おそらく唯一ピット・アニストン夫妻の場合だけは違ったが、この事例は逸脱しているという点からも独自のケーススタディの対象となるべきものと思われる)。オプラのインタビュイーに対する観衆の喝采や歓喜(そしてオプラ自身によるヒステリーの操作と加担)は、セクシユアリティの旧来のパラダイムを信奉しているというよりも、この曖昧性の領域における遊び心を知つての行為に思われる。ホームズの妊娠が明らかになると、タブロイド各紙や大衆メディアはすぐさまその「トリック」を暴露しようとし、またもや、あらゆる人がクルーズが家長として誤用を犯していることをすでに知つているしそれを楽しんでるが、ただ単にキャンパな読み方を強めるために「舞台裏」の詳細を知りたいのだ、とでもいうように騒ぎ立てた(このことは数え切れないほどの方法で行われた——彼女の処女性に関する議論から人工授精の噂<sup>24</sup>、あるいはもつとふざけた宇宙人誘拐説やら、「昔ながらのやり方で」行われたのだとする親族のコメントなど、明らかにこのニュースが疑いや懐疑をもつて受け止められたことを示していた)。クルーズとホームズに関する世間のヒステリーは我々がポスト異性愛の時代に突入しようとしていること(おとぎ話を卒業しようとしていること)を示し、恋愛、結婚、そして家族の新しい定義を生み出そうとする狂乱的な楽しいさまざまな試みを指し示しているのだらう。実は、それが一番ハッピーなハッピーエンドかもしれない。

註

- 1 Laura Smith, "Charles to Repent 'Manifold Sins,'" *Guardian* April 8, 2005. <http://www.guardian.co.uk/monarchy/story/0,2763,1454841,00.html>.
- 2 Chris Hohnlund, "Postfeminism from A to G," *Cinema Journal* 44, 2 (2005). 同誌収録の Yvonne Tasker and Diane Negra, "Postfeminism in Contemporary Media Studies," 及び Charlotte Brundson, "Feminism, Postfeminism, Martha, Martha, and Nigella" の参照(51頁)。
- 3 例えば *Star* Oct. 8, 2005 の表紙写真および見出し "Nick and Jessica's Sham Marriage: Why Are They Still Faking It?" (「ニックとジェシカの偽装結婚——どうして彼らはまだだまきょうと」つづるのか?) を参照せよ。
- 4 J. L. Austin, *How to Do Things with Words* (Cambridge: Harvard UP, 1975), p. 8, pp. 17-19.
- 5 巷説による「とある雑誌はマックカートニーとミルズに結婚式を独占報道する対価として二百万ドルを提示した。夫妻はこれを断つたものの、彼らがキスしている写真をチャリティー・オークションに出品した。」 [http://people.aol.com/people/pop\\_up/0,10772,261298,11\\_photos,00.html](http://people.aol.com/people/pop_up/0,10772,261298,11_photos,00.html).
- 6 Austin, pp. 8-9.
- 7 <http://news.bbc.co.uk/2/hi/entertainment/4431331.stm>.
- 8 Oliver Burkeman, "Minnelli Weds Fourth Husband on 'Night of a"



- Thousand Facelifts.” *Guardian* March 18, 2002, <http://www.guardian.co.uk/international/story/0,3604,669414,00.html>.
- 9 [http://home.c2i.net/nij/michael\\_jackson\\_interviews\\_prime2.html](http://home.c2i.net/nij/michael_jackson_interviews_prime2.html).
- 10 “Love on the Rocks” *DateLine NBC*, <http://msnbc.msn.com/id/485005>.
- 11 Richard Dyer, “A Star is Born and the Construction of Authenticity,” *Stardom*, ed. Christine Gledhill (London: Routledge, 1991), 132–40.
- 12 映画の中の自由的文章は、ヘレン・ミンヒルマンの以下の書の中で纏ひ込まれる。<sup>23</sup> Wade Jennings, “Nova: Garland in A Star is Born,” *Quarterly Review of Film Studies* (Summer 1979): 321–36. 本作品の終結は、ゴッホの式や参照や<sup>24</sup> Janet Staiger, “The Logic of Alternative Endings: A Star is Born,” *Interpreting Films* (Princeton: Princeton UP, 1992), pp. 154–77.
- 13 Jeannette Walls and Ashley Pearson, “The 2003 Scoopie Awards,” *MSNBC.com* Dec. 29, 2003, <http://msnbc.msn.com/id/3785420>.
- 14 Michelle Tauber, et. al., “Liza-palooza!” *People.com* March 22, 2002, <http://people.aol.com/people/magazine/magazinefeature/0,11369,218747-1,00.html>.
- 15 Burkeman.
- 16 Michelle Tauber.
- 17 Jeannette Walls and Ashley Pearson, “Vera Wang Won’t Be Dressing J. Lo,” *MSNBC.com* Nov. 11, 2003, <http://msnbc.msn.com/id/3158737>.
- 18 Jon Clarke, John Bell, and Maggie Kim, “Cruise Loves Cruz,” *Star* March 8, 2004: p. 26–27.
- 19 『ペーリ』にはこのカッパルのラブシーンがあり、それに続いてレスビアンを演じるロボスの驚愕する台詞が、その時点では恋人同士であった(アフレックに投げかけられるのである。「あんたが私のペンナになりたがってると思っってたわ」
- 20 *In Touch* March 28, 2005の表紙見出し“Can Jen trust her heart again?”
- 21 Patricia Mellencamp, *A Fine Romance: Five Ages of Film Feminism* (Philadelphia: Temple UP, 1995), p. 5.
- 22 Teresa de Lauretis, *The Practice of Love: Lesbian Sexuality and Perverse Desire* (Indianapolis and Bloomington: Indiana UP, 1994), p. 7.
- 23 例として以下のサイトや参照や<sup>24</sup> <http://www.defamer.com/hollywood/com-cruise/index.php>, <http://www.scientomogy.info/index.html>.
- 24 例として参照や<sup>24</sup> *The National Enquirer* Oct. 24, 2005, “Tom and Katie, the Question Everyone is asking: Test-tube baby.... inside.... We reveal the REAL story.”

#### 訳註

- \*1 David Gest の名字は、日本での報道ではジェストと表記されることが、正しくはゲストだといふことであり、今回はゲストと統一した。

## ●コメント

## 鷲谷花

発表中にビデオ映像が紹介された一九八一年のチャールズ皇太子とダイアナ・スペンサーの結婚式を思い出してみてもよいが、欧州の王族やハリウッドのスターなど、「セレブ」と呼ばれる人々のロマンスと、その究極のゴールとしての結婚は、不特定多数の観客に向けた公的なパフォーマンスとして遂行されてきた。こうした「セレブ」のロマンスと結婚は、かつては異性愛結婚という制度に意味と力を与える遂行的行為として、マスメディアを介してその成り行きを観察する一般人に、「かくあるべき」モデルを示し、自身もそのモデルに従って適切に行わしめようという希望を抱かせるべく、有効に機能していたのかも知れない。

本発表で取りあげられた、近年の「セレブ」のロマンスー結婚の代表的な事例においては、そのパフォーマンス性はとどまることなく強化されつつあるといえる。そこには、「セレブ」たちが公共空間において築きあげてきたスター・ペルソナ、恋愛ー結婚資本主義の市場において高い価値をもつ商品の数々

(ハリー・ウィンストンのジュエリー、ヴェラ・ウォンのウェディングドレス、高級ホテルやヨーロッパの古城などの式場……)など、膨大なリソースが投入される。また、ロマンスのはじまりから結婚に至るまでのプロセスは、たとえば異性愛カップルの交際から結婚までのプロセスを辿るリアリティTVショーの例にみるように、適切な物語と舞台設定を与えられて、入念に演出され、マスメディアによって逐一報道される。にもかかわらず、これら的大がかりで公的なパフォーマンスとしての「セレブ」のロマンスと結婚において、目下、観察者の関心を惹きつけ、議論を喚起してやまないのは、その華麗さ、完璧さではなく、むしろ「不適切表現 *misapplication*」の**かずかず**である。

たとえば、本発表で最後に紹介されたトム・クルーズとケイティ・ホームズの現在進行中のロマンスは、そうした今日的な状況を典型的に体现するものといえる。トムが「オプラ・ウィンフリー・ショー」に出演した際の「常軌を逸した」はしやぎぶりや、ケイティの妊娠の発表、トムの帰依する新興宗教サイエントロジーの集会でトムとケイティが披露した愛のデュエットや、万事がサイエントロジーの教義に沿って遂行されるというケイティの出産計画に至るまでの紆余曲折は、異性愛ロマンスの「自然」かつ「真実」の表現として受けとられることはほとんどなく、世界の野次馬による憶測とツツコミにさらされてきた。しかし、本発表は、こうした現象を、「ロマンス」と「結婚」の

概念そのものに危機をもたらすものとは解釈しない。今日の「セレブ」のロマンスと結婚（そして破局）のパフォーマンスに、メディアとその利用者がさまざまな「誤用」を見出し、そこから多様な「キャンペーン」解釈を引き出してゆく過程に発表者ヴィッキー・キャラハン氏が見いだすのは、異性愛体制がかつての絶対的な権威と強制力を失った、いわば「ポスト異性愛」の段階にあって、新しいロマンス／結婚／離婚のありかたとはいかなるものかを問う公共の討議の可能性である。

しかし、はたして「セレブ」の公的なパフォーマンスに、一般の観察者が「誤用」を見出すことが、ポストフェミニズム／ポスト異性愛の時代における新しいロマンス／結婚／離婚のありかたについての討議の機会を開くものかについては、こと日本の状況を鑑みれば、議論の余地もあるように感じる。たとえば最近の日本の「セレブ」のロマンス／結婚のパフォーマンスの例として、二〇〇三年に挙行された柔道の金メダリスト田村亮子とプロ野球選手の谷佳友の結婚式を考えてみよう。五輪のマークをかたどった五色の婚約指輪から、時代錯誤的に盛大なパリ挙式に至るまで、あまりにも過剰でキツチユなパフォーマンスが散りばめられたふたりのロマンスと結婚は、大いに世間の注目を集めた。インターネット上の匿名掲示板には、「谷です、助けてください!」「谷を救え!」「結局われわれは谷を救えなかったわけだが:」といったトピックが溢れ、かたや女性向けの結婚情報や芸能界ゴシップの掲示板においては、亮子・

佳友の結婚式を「反面教師」として参考にする方向性に議論が形成されていった。亮子・佳友のカップルによる（おそらくは亮子主導であると解釈された）過剰な「ロマンス／結婚」のパフォーマンスが世間に呼び起こした反響は、大勢においては、男性側の「嫁にするなら美人で控えめな専業主婦が望ましい」という価値観、女性側の「私達らしく」「自然体」（『ジミ婚』）の結婚式が望ましい」という価値観を反映したものであったといえる。つまり、現状の恋愛／結婚資本主義の市場において主流である価値観が、いかに広く深く内面化されているかを示すものであったといえるだろう。この事例にみるように、「セレブ」によるロマンスと結婚のパフォーマンスが、一般の観察者によってひとしく「誤用」と判断されることは、「かくあるべき」ロマンスと結婚の規範に関する共通の了解が成立していることを前提とする。つまり、「誤用」の発見と「キャンペ的な」解釈は、ことの成り行きを観察し、解釈する立場にある一般人を、むしろ既存の異性愛ロマンス／結婚のハビトゥスに縛りつける効果を発揮する場合もあるのではないか。

さて、発表者は、ロマンス／結婚という既存の制度が、既存の排他的なヘテロセクシズムを脱し、多様なセクシュアリティに開かれつつある状況を指摘し、その一例としてT.V司会者のロージー・オドネルとパートナーのケリー・カーペンターの結婚をあげている。ここでは、東アジアにおけるポストヘテロセクシュアリティ的なロマンス／パートナーシップが、セレブの公

的なパフォーマンスとして示された事例として、二〇〇三年四月一日に自殺したレスリー・チャンの葬儀を紹介したい。葬儀においては、レスリーの長年のパートナーだった唐鶴徳（ダフイ・トン）氏が喪主を勤めた。葬儀の一部始終はマスメディアによって大々的に報道され、唐氏がレスリーに捧げた白い花輪と『長恨歌』の一節（「天長地久有時尽 此愛綿綿無絕期」）、レスリーの双子の姪の唐氏に対する感謝のスピーチ（「お二人の姿を見て、愛とはこういうものだと思えました」）、そして、悲しみのあまり歩くこともおぼつかないまま、それでもレスリーの遺影から視線を離すことのできない唐氏の姿などが注目を集めた。中国語メディアにおいて、当初、レスリーの死は、「同性愛の三角関係に悩んだ結果の自殺」として、スキヤンダラスに（いささか同性愛嫌悪的に）報道されていたが、葬儀の当日、レスリー・チャンの生前のスター・ペルソナの記憶が、『金枝玉葉』の宣伝写真を転用したレスリーの遺影に視線を注いでやまない唐氏の映像と重なったとき、スキヤンダルは完璧な「真実の愛」のロマンスへと反転する。葬儀現場において、あるいはテレビやインターネット、翌日以降の新聞や雑誌を通じて事態を見守っていた観察者一同は、おおむね唐氏の行為を

正當かつ誠実なものと感じ、受け容れた。この事例は、当初はマスメディアによって「不適切な」イメージを負わされようとした同性間のロマンスが、当事者の公的な場でのパフォーマンスが、多数の観客の目にとって正當かつ誠実であり、信頼に足るものと受けとられることで、逆に強力な「適切性」をもって流通するようになったものといえる。

しかしながら、日本のマスメディアにおいては、レスリー・チャンの自殺は、あくまでも「同性愛の三角関係に悩んだ結果」であるとするスキヤンダラスな報道方針が堅持された。テレビのワイドショーやタブロイド紙におけるレスリーの葬儀の報道では、レスリーと唐氏の「ロマンス」については一切言及されることなく、唐氏の映像が報道される機会もわずかだった。ここでは、もっぱら参列者一同のマスク姿（当時はSARS流行のピークだったため）と、日本から葬儀に参列した芸能人たちの姿とコメントのみが注目されるにとどまった。結局、日本においてポスト異性愛の時代のロマンスと結婚について公共の討議がなされる機会が到来する日は、いまだに遠いのもかもしれない。